

## 戦争に奪われた青春

京都府 徳田 房子

### 一 父母のこと

私は、昭和七（一九三二）年に朝鮮咸鏡北道雄基という、小さな港町で生まれた。

父は、明治三十一（一八九八）年に岐阜県関市の近郷の農家に、姉弟三人の長男として生まれ、幼いころから百姓を嫌がり、小学四年生で学業を修了し、十歳で名古屋のある問屋に丁稚奉公に出た。一人前の商人になるための修行は非常に厳しく、誠につらいものであったそうだ。しかし頑張り抜いた父は、大正三（一九一四）年十六歳のとき、狭い内地で身を立てるか、それとも広い外地に飛び出して身を立てるか、とても悩んだそうだ。その結果、翌年、単身、船で朝鮮に渡ることを決意、故郷をあとにした。着いた港は清津。縁あって、酒屋を営む徳田商店に奉公、商人としての第一歩が始まった。

母は、明治三十七年に広島県熊野で生まれた。筆で有名な土地である。三歳下の弟と二人姉弟であったが、母親を七歳で、父親を十三歳でなくした母は、弟を後継ぎとして残し、大正八年十五歳のとき母親の妹である叔母を頼って、単身清津に渡った。叔母の嫁ぎ先は、父が奉公している徳田商店であった。

叔母夫婦には子供がなく、父より先に奉公していた男性を養子に迎えたが、父もまた二十歳のころに徳田家の養子となった。大正十一年、父が二十四歳、母が十八歳のとき二人は結婚した。

大正十二年、清津の徳田商店は義兄が後を継ぎ、父は雄基に小さな店を持ったのである。いわゆる支店という形ではあったが、何もないところからの出発はとても大変だったそうだ。しかし、幸いなことに取引先の多くの方々の応援もあり、店は繁盛したそうだ。そのころの朝満国境は、馬賊や

匪賊が横行し治安はかなり悪かったそうだ。

昭和十四年、長男薫が、昭和二年には長女幸子が生まれたが、昭和七年一月に薫が病死し、その年の五月に私が次女として生まれた。十一年に次男恭三が生まれたが、生後数カ月で病死した。

### 二 羅津に移住

昭和十二年に羅津に父が新築した家に移る。住所は羅津府富士見町四丁目二十六番地、野っ原に建つ一軒家だった。

羅津の町の東西南北はおぼろ気な記憶しかないが、今想像すると、町の北部に小学校があり羅津川が町の中央部を流れていた。河口の南側に関東軍の特務機関があり、その海岸を南に行くと、天然の良港といわれた羅津港がある。その埠頭からは、すばらしい景観の大草島、小草島が見られた。埠頭のそばの山の方に、満鉄関係の家がたくさんあった。

家から南に歩けば憲兵隊や開拓会館、西に歩けば昭和通り、通りの南突き当たりが羅津駅である。昭和通りに面して国際会館、登記所、警察署など

の建物が並び、一生忘れることのない思い出深い町だ。

十四年羅津小学校に入学、二十年卒業、ついだ女学校に入学。それまでの私たちは、何不自由ない幸せな生活を送っていた。

母は、姉に東京の師範学校に行くことを強く勧めていたが、姉はなぜか応じないで、家事や店を手伝っていた。私は、女学校を出たら東京上野の音大音楽科へと、密かに夢見ていた。

羅津での遊びは毎日が楽しかった。橋を渡って町に行けば、たくさんの友だちがいた。もちろん遊びは町の方が多かったが、警察には道場があり、剣道をよく見に行つた。当時の署長さんは田浦さんという方で、子供のないご夫婦は私たちをよくかわいがって下さった。田浦さんは咸興道庁に栄転され、後任は中原さんという方であった。

憲兵隊にもよく行つた。隊長さんの家で散髪屋さんごっこをして遊んでいたとき、本当に髪の毛を切つて叱られたり、独身憲兵の賄いの小母さん

に踊りを教えてもらつたり、馬にも乗せてもらった。内地から訪れる慰問団を見に行くことも、楽しみの一つであった。

十六年、太平洋戦争が勃発、そのころには警察と私の家の間に立派な監視所の建物が建ち、その中には消防団、警防団の詰め所もあり、消防車二台が常駐していた。そして、なぜか監視隊長は父であった。あるとき、一人のソ連人が憲兵に捕まり、大騒ぎになったことがあった。私も憲兵隊に見に行つたが、背の高い大きな男だった。

戦況がだんだんと悪くなるにつれて、灯火管制も一段と厳しくなつた。明かりが外に漏れると、警防団の人が注意して回るようになった。私たちが外で写生などしていると、山や町の様子は絶対に描かないようにと、憲兵が注意することもあった。薬にするために山でキキョウの根を掘つたり、

松葉拾いや草を刈つて堆肥を作つたこともあった。監視隊の建物も、いつの間にか内地から満州へ、満州から南方へ移動する兵隊さんの宿舎になった。

兵隊さんの中にはいろいろな職業の人がいて、軍手をほどこして私たちの手袋や靴下を編んでくれたり、散髪や靴の修理をしてくれたりした。そのうちに、移動の日が決まるまで、野原を耕し畑を作つてくれる兵隊さんまで現れた。家に置いてきた子供たちが恋しいのか、よく遊んでくれた。その兵隊さんたちを慰めるために、お酒や煮物をよく私たちに持たせた父母、今思えば胸が痛くなる。一杯のお酒、少しの煮物がどんなにか嬉しかったのか、涙を流す兵隊さんも大勢いた。今にして思えば、監視隊の前の防空壕も、当時の兵隊さんたちが、入れ替わり立ち替わりして造つてくれたのではないかと思う。中は炊事ができるようになつていた。

女学校では、勉強もさることながら畑作業もよくした。畑を耕し、まいたそばの花が真っ白に咲いていた。家の畑にはいろいろな豆、カボチャ、ダイコン、キャベツ、ジャガイモなどが実り、収穫を待ちわび夏休みに収穫をと楽しみに待っていた。

た私たちに、運命を一変させる夜がくることになる。

その間に、私にも弟妹ができた。十三年に三男健雄<sup>たのお</sup>、十五年三女紀代子、十八年四女八重子、十九年四男勝正の四人だ。八重子は少し病弱で、誕生日が姉と全く同じ四月十八日。そんなこともあって、姉はことのほか八重子をかわいがり、よく面倒を見ていた。

### 三 終戦前の一週間

二十年、女学校はまだ夏休みに入っていない。確か九日も学校に行つたと思うが、記憶のない。灯火管制の下で夕食も風呂も済ませ、いつものように床に就き、どんな夢を見ていたのだろうか。突然夢は破られた。九日の深夜、正確には八月十日の未明だったかもしれない。闇の空を震わす大音響、飛行機の爆音と共に火の手が上がつた。飛び起きた私たちは、何事かと驚き窓から外を見ると、河口付近が火の海だった。そこは関東軍の特務機関のある場所で、第一発はそこに落ちたよ

うだった。投下される照明弾が、暗かった羅津の町を真つ昼間のように明るく写し出していた。父が言った。「ソ連が日ソ中立条約を破って参戦した」と。爆撃はものすごく、朝になっても続いた。私たちの地獄への道の始まりだった。

十日の朝がきた。爆撃の間を縫って、当座の身の回りの物や食料、ミルク、おむつ、鍋二つをリヤカーに積み、防空壕に運んだ。機銃掃射されたときは死ぬかと思った。何とか全員避難することができた。ウラジオストックは近い。ソ連の飛行機は次から次へとやってきて、容赦なく爆撃、機銃掃射を繰り返して、羅津の町を破壊し、多くの人が死んだ。それでも、昼頃には爆撃は止んだような覚えがあるが、飛行機はちよつとでも動くものを見つけて、即座に機銃掃射してきた。それでも母は、その隙間を狙って家に何かを取りに行った。低空で飛ぶ飛行機の音が、とても怖かった。私と姉が恐る恐る外を見ると、目に入った建物は監視隊と我が家だけで、あとの建物はすべて破壊され

ことを考えるな」壕の中は一瞬しーんとなった。私は瞬間に「救いの神が現れた。助かった」と思った。沈黙を破り、中原さんは口を切った。「町には兵隊はおろか、住民も全部避難してだれもない。監視隊に消防車が二台、無事に残っている。徳田さん始め、みんな二台の消防車に乗って避難して下さい」中原さんは続けてみんなに「数日もすれば、また家に帰れるから」と言い、父に向かって「私のことは心配いりません。女学校の近くの山に車が隠してある。それで避難しますから」と言いながら父の手から銃を取り上げて帰って行かれた。

母を始め、姉も私もほつとはしたが、体の震えはなかなか止まらなかった。下の弟妹はこの重大さがよく分からないようで、隅っこの方で泣きながら小さくなっていた。しばらくの間呆然として立っていた父が、悪夢から覚めたように元に戻った。私たちはヘタヘタとその場に座り込んだ。母が「お父さん、早く支度を。幸子、早く荷物を

て跡形もなかった。

狭い防空壕の中で、母と姉が夕食の白いご飯を大きな鍋で炊いていた。父が外に出た。しばらくして帰ってきた父の手に、一挺の鉄砲がしっかりと握られていた。父が突然言った。青ざめた顔は引きつっていた。「もう駄目だ。おそらくソ連軍が羅津に攻めてくるに違いない。見つければ殺される。その前に、ここでみんな死ぬか」今まで見たこともない恐ろしい顔だった。私は耳を疑った。みんなの間に、しばらく沈黙のときが流れた。そして、ことの重大さに母と姉がものすごい形相で父に抵抗した。「お父さん、何を言ってるの」「こんな所で今死ぬのは嫌だ」大声で泣きながら叫ぶ姉、私も恐怖に身を震わせ、大声で「死ぬのは嫌だ。死ぬのは嫌だ」と叫んだ。狭い防空壕の中は大騒動になった。

そんな最中に、警察署長中原さんが訪ねて来られた。そして、中の異様な雰囲気を感じたのだろう。父に向かって一喝された。「徳田さん。馬鹿なまとめて」それを聞いた父は、「分かった」と言って男の人と外へ出た。羅津の町を破壊した飛行機は、そのころになるとほとんど飛んでいなかったと思う。

父が消防車の所に行っている間に、母が家に何か取りに行った。外はもう闇が迫り、暗くなっていた。慌てて帰ってきた母は、真つ青な顔をして震えながら「だれかが家の中にいる。人数はわからないが、荷物を運び出している。恐ろしくてとても中に入れない」と言った。今度は姉が「それなら私が行ってくる」と言いだし、それを止めるのに母は必死で「殺されるかもしれない。絶対に行っては駄目」と姉の腕を強くつかんだ。もう既に、朝鮮人たちの略奪が始まっていたのだ。

父の帰りがあまり遅いので姉と二人で見に行くのと、車のエンジンがどうしても掛からないという。もう一台の車は出発したらしい。あきらめた父に、母がぼつんと言った「牡丹江の正雄さんたちはどうしてるのか」父の弟のことである。正雄さんも

父同様、牡丹江で酒屋を営んでいたのだ。

消防車をあきらめ、リヤカーに五歳の紀代子と荷物と炊きたてのご飯を積んで、父が引つ張った。母が勝正を、姉が八重子を背負い、私はリュックサックを背負って健雄の手を引いて歩き出した。暗闇の中に我が家がぼーっと見えた。夜十時は過ぎていただろう。夏といっても羅津の夜は寒い。セーラ服の上に毛糸のセーター、モンペに靴下と、初冬並みの格好をしていた。いつの日にか我が家に戻れることを信じながら、羅津をあとにした。

跡形もなく崩れ去った憲兵隊舎に数人の人影が見え、土を掘って何か探していた。そのとき私は、捕まったソ連人はどうなったのだろうと、そんなことを考えながら歩いていった。満鉄の社宅を通り抜けて山の方に向かい、峠に着いた。峠から見た海の至る所で、船が黒い煙を上げて燃えていた。峠を少し下がった所に広場があった。広場と道路には、たくさん軍のトラックが放置されていて、荷台には大勢の兵隊さんや船員さんの死体が積ま

についていった。

途中出会った小学校の校長先生が、御真影をしつかりと風呂敷に包み背負っておられたが、それ以来再びお目に掛かることはなかった。知っている方にもたくさん出会ったが、みんな疲れと寝不足のためか口数は少なかった。そこがどこなのか全くわからないが、広い海と白い砂浜が長く続く、眺めの良い山道に差し掛かったとき父が言った。多分昼ごろだったと思うが、「この先に、確か道場があるはずだ。子供たちも疲れているから、少し早いけどその錬成道場で休むことにしよう。もう少しだ、頑張って歩け」と言われ、私たちはもう少し、もう少しと頑張って歩いていた。突然艦砲射撃が始まった。驚いたみんなは、蜘蛛の子を散らすように林の中に逃げ込んだ。

激しい艦砲射撃は長く続いた。やっと終わり静かになったので、林を出て海の方を見ると、無数のボートが砂浜めがけて走ってきた。ボートは砂浜に着くと、そのまま砂の上を走り出した。船が

れていた。中には息のある人も大勢いて、口々に「助けて、痛いよー痛いよー、熱い熱い、俺を置いて行くな、水くれ」と訴えている。暗闇の中に光る月、その青白い光の中から聞こえるうめき声、腕や足を爆撃でやられ血まみれ、その光景は地獄のように凄惨だった。十三歳の娘には目を開けて見ることもできず、兵隊さんの悲痛な叫びを聞きながら何にもしてあげられず、ただ涙を流しながら歩いていく私たちだった。足手まといだから、邪魔だからと切り捨てられ、見捨てられた兵隊さん、胸が痛く切なく本当にかわいそうで今も忘れることはできない。

歩いては休み、休んでは歩き、十日の夜も過ぎ十一日を迎えた。いつの間にか、大勢の人たちと一緒に歩くようになっていた。山道はだんだん陰しくなり、とてもリヤカーを引くことはできなくなり、おのおのが荷物を持って歩いた。私は、両手に弟と妹の手を引いて行くことになった。ともすると遅れがちだったが、必死になって大人たち

陸を走る。そんなことが信じられなかった。あとで分かったが、それは水陸両用艇という車だそうで、当時不思議なことで、我を忘れて見ていたことを思い出す。

静かになった山道をどのくらい歩いただろうか、辺りはすっかり暗くなっていたが、やっと道場にたどり着いた。中は既に大勢の人が休んでいた。心づくしの夕食を頂き、電灯の点かない暗い部屋で、私たちは横になった。人のざわめきでなかなか寝付かれなかったが、いつの間にか眠ってしまった。

しかし、その眠りも再び破られた。艦砲射撃だった。みんな飛び起きて、我先にと玄関に殺到した。「昼間の兵隊が攻めてくるぞ」「落ち着け」「慌てるな」「踏むな」「馬鹿野郎」「危ない」いろんな怒号が飛び交った。父は「勝手に動くな、はぐれるぞ。幸子、行くな。離れるな」と必死になつて叫んだが、その声は姉には届かなかったのか、姉は素早く八重子を背負い健雄の手を引つ張って、

人波と共に外に飛び出していった。それは、あつという間の出来事だった。外は真つ暗闇で、艦砲射撃の弾が花火のように入り乱れて飛んでいた。夜の静けさを破り行われた艦砲射撃の音は、昼間より大きく響き、とても恐ろしいときが流れた。

どこに逃げたか全くわからない姉を探すこともできず、私たちは道場近くの林の中で一夜を明かした。生きた心地がしない夜だった。

十二日の朝、恐ろしい艦砲射撃も終わり、荷物を放り出して逃げた人が、次々と道場に帰ってきた。その人並みの中に姉の姿を見つけた父は、「幸子、無事だったか」と叫びながら走り寄り、しっかりと抱きしめていた。弟のいないことに気付いた母が、「幸子、健雄はどうした。どこにいるの」と聞くと、姉は泣きながら「健ちゃんはまだ歩くのが嫌だと言って、横に停まったトラックに乗ってAさんの家族と一緒に行ってしまった」父と母が何度聞いても要領を得ない答えに、父は「こんな所で時間を潰すわけにはいかない。とにかく清

った。周りの人の羨望の目が痛かった。トラックは走り出した。これで羅南まで歩かなくてもいい。私は嬉しかった。大勢の兵隊さんと共に揺られながら、トラックは羅南の駅に着いた。途中大切な荷物の一つ、信玄袋を落としてしまったが、そのときはそんなことどうでも良かったのだと思う。

羅南の駅は大勢の人であふれ、構内には長い列車が停まっていた。この列車は道庁専用列車で、南に行く最終列車であることが分かった。父はすぐ道庁に向かった。父のお陰で、私たちもその列車に乗ることができた。

父は、姉に弟と別れたときの様子を何度も聞いていた。そして母には「京城まで行って待つように。京城には知人が大勢いるから心配はない」と言っていたが、母は「私たちだけ先に京城まで行ってしまったあとで南北が封鎖され、そのためにお父さんと会えなくなるかもしれない。咸興には田浦さんがおられるから、私たちは咸興で待ちます。お父さんも必ず田浦さんの所に来て下さい」

津まで行こう」と歩き出した。母は半狂乱で、「健雄を置いていくわけにはいかない。私が探しに行く」と言い出す始末。父が「あとのことは俺に任せろ、必ず健雄は俺が探し出すから」と、必死に母をなだめていた。私は、「幸ちゃんがお父さんの言うことを聞かず先に逃げるから、こんなことになった」と姉を責めた。さすがの姉も、何も言わず泣いていた。

不安を胸に、重い足を引きずって歩いている私たちの横を、兵隊を乗せた軍のトラックが何台も通り抜けていった。すると一台のトラックが停まり、一人の将校が降りてきて「徳田さん」と父に声を掛けた。その人は父の知人で、人波の中から私たちを見つけて、声を掛けてくれたそうだった。「このトラックは羅南の駅まで行きます。乗りませんか」その言葉に、父は弟の件を話し「私たちは清津に……」と言うと、「清津の日本人はすべて避難して、だれもいません」との答え。父は羅南に行く決心をして、私たちはそのトラックに乗せてもら

と、頑として聞かない。

「母も姉も私も、今ここで父と別れたら一生会えなくなるかもしれないと思うと、涙で顔がくしゃくしゃになった。父一人を羅南に残し、満員の列車は静かに動き出した。道庁の許可を得られなかった人たちが、列車にしがみつくと、その人たちを駅員が無理やり引きずり降ろしている。そんな光景を、私は呆然と見ていた。ここで、父と別れて再び会えるのだろうか。不安と悲しみに胸が張り裂けそうだった。

列車は夕方、咸興の駅に着いた。田浦さんの家は道庁の官舎で、道庁のすぐ近くにあった。田浦さんは私たちを快く迎えてくれ、嬉しかった。田浦さんに健ちゃんが途中ではぐれたこと、父が羅南から一人で探しに行ったことなどを話すと、我がことのように心配してくれ「絶対帰って来るから」と、母を励ましてくれた。十二日の夜は、ゆつくりと手足を伸ばして眠った。どんな夢を見たのだろうか、咸興での第一夜が更けていった。

十三日、十四日と過ぎ、十五日に「今日正午に内地からラジオを通して重大放送がある」とおじさんに言われ正座して待っている、ラジオから天皇陛下のお声が流れてきた。放送は雑音がひどく、私にはよくわからなかった。大人たちは「日本が敗れた。戦争に負けた」と泣き崩れていたが、私はもしかしたら羅津の家に戻ることが出来るかもしれないと思った。でも、それは間違いだった。終戦を機に朝鮮人の態度がだんだんと横柄になり、保安隊が編成されて日本人に指図するようになった。日ごとにソ連兵の数も増し銃を持つて町を歩き回るようになった。兵隊の中には女性もいた。

#### 四 父との再会

ソ連兵の傍若無人な振る舞いは、目に余った。土足で家上がり、目ぼしい物は手当たり次第に取り上げた。特に腕時計を好み、幾つも腕にはめていた。露骨な女狩りも始まり、「マダムダワイ、マダムダワイ」と、昼となく夜となく女性を追い

んを連れて帰って来るのだろうか、そんな思いで日が過ぎていった。

暑い八月も終わり、九月の始めころ、田浦さん宅に数人のソ連兵が来た。通訳の人が何かおじさんに伝えると、憲兵らしい兵隊がおじさんの腕をつかみ、表に連れ出した。おじさんはこんな日にくることを覚悟していたとはいえ、顔は厳しく少し青ざめていた。黙って連行されるおじさんの後ろ姿に、おじさんは涙を流しながら手を合わせていた。

後日おばさんから手紙が届き、おじさんは極北の地シベリアで四年以上強制労働をさせられた後、無事帰国されたとのことであった。

町では、次々と大きな建物や家がソ連軍や朝鮮人に接収され始めた。母は心労のあまり、床に就く日が多くなった。感興に、秋と一緒に冬が忍び寄ってきた。暦が十月に変わったある日、家の前に男の子を連れてた乞食が現れた。よく見ると、何と父ではないか。羅南の駅で別れて五十日余り、

まわす様は、目を覆いたくなるばかりであった。母は当時四十歳で、今なら女盛りであろうが、昔はどちらかといえば老人の部類に入ったし、その上体重八十キロ以上の太りよう、さらに両腕に幼い子供を抱きかかえた女に、ソ連兵は興味を示さなかった。しかし母はソ連兵を見かけると、大きな体を震わせておびえていた。姉は十八歳で背は高いし、顔立ちも美しい年ごろの娘。髪を短く切り、顔に墨を塗り男の服を着たりしていたが、ソ連兵の毒牙から逃れるため毎日必死の努力をしていた。私は十三歳だったが、幸いなことに体はあまり丈夫ではなく、やせて器量の悪い娘にはソ連兵は目もくれなかった。でも、やはりソ連兵が来ると恐ろしくて、いつも母の陰に隠れて震えていた。

父と別れて十日余り、母の食欲がだんだんと無くなってきた。日ごとに弱り憔悴してゆくので、私たちはもちろん、田浦さんも心配していた。もう父に会えないのではなからうか、本当に健ちゃん私たちの気持ちに「あきらめ」という文字が漂い始めたころ、父は弟を連れて私たちの所に無事帰って来たのだ。神様は私たちに奇跡を与えて下さったのだ。悪臭を放つ二人に、母も私たちも取りすがって号泣した。髪も髭も伸び放題、服はボロボロ、顔も手も足も真っ黒、健ちゃんはやせて目ばかりぎよるぎよるとして、とても健ちゃんとは思えなかった。「お母さん、約束通り、健雄を連れて帰ってきたぞ」「お父さん、有難う。お帰りなさい」あとの言葉が続かず、涙、涙の母と私たちだった。「奇跡だ、奇跡が起こった」と叫びながら、家の中は「やれお風呂だ」「やれ飯だ」と大騒ぎとなった。健ちゃんはいつの間にか靴がなくなり、足にはボロ切れを幾重にも巻いてあり、血も出ていた。

二人が落ち着くまで数日が必要だった。疲労と、余程の恐怖を体験したのであろう。健ちゃんの顔に、なかなか笑みが戻らなかった。父親と一緒にとはいえ、こんなに長い道のりを、七歳の子供がよ

く耐えて歩いたものと、胸が熱く締め付けられるように痛かった。姉は自分の責任だと言って、健ちゃんの足に菓を塗りながら「ごめんね、ごめんね」と、何度も何度も繰り返し詫びていた。

ようやく、父がポツリ、ポツリと話す日がきた。十二日、私たちと別れた後、駅の周囲は大混乱で、列車に乗れなかった人たちは「何で道庁の間で俺たちを乗せないのか。そんなことってあるのか。次の列車はいつなのか」など、いろいろな怒号が駅中に渦巻いたそう。父はそんな声をあとに、一刻も早く健雄を探すために北へ向かったそう。姉から何度も聞いた知人の名前を頼りに、南下する人、南下する人に声を掛けた。「羅津の徳田です。息子を探しています。年は七歳で羅津のAさんと一緒のようです。Aさんをどこかで見掛けませんでしたか」とすれ違う人、すれ違う人に声を掛けて、夜もろくろく寝ないで歩いたそう。男の一人歩きは早く、無我夢中で歩いたとか。満州に入るまでの山道は相当きつかったらしい。や

供が二人いる。主人が兵隊にとられ、どうにもならないから一緒に連れて逃げようとしていた途中で、あの艦砲射撃に遭った。翌日トラックで移動中に、徳田さんの娘が男の子の手を引いて泣きながら歩いているのを目撃、様子がおかしいので車を止めて事情を聞くと、『昨夜の件で両親とはぐれた。道場まで帰ったら、両親に会えるかもしれない』などを話している間に、息子さんが急に『もう歩くのは嫌だ』と言ってトラックに乗り込み、娘さんが何度も降りるようにと説得したが降りず、怒った娘さんが急に走り出し、人波の中に入り姿が分からなくなった。息子さん一人を放っておくわけにもいかず、日本まで連れて帰ったら必ず徳田さんに会える信じ、一緒に連れて来た』と言われたそう。それから「自分の子供の体調が悪く、良くなり次第南に行こうと思っていた」とも言われたそう。父は思ったそう。「昼夜なく歩いてきたお陰で息子に会えた。着くのが遅かったら、会えなかったかもしれない」と、運の良さを

つと満州に入ったところで延吉に行くか、それとも吉林かと迷っていたところ、父の前に神様が現れた。偶然羅津の知人と遭遇したのだ。その知人に息子のことを話すと、「息子さんは吉林でAさんの家族と一緒にいる。自分も吉林の方に避難したが、いろいろ考えて南下してきた」と言われたそう。父はその人に様々な情報を聞いて、急いで吉林に向かったそう。山の中で、終戦のうわさを聞いたとか。何日かして吉林に着いた父は、知人の情報を頼りにAさんのいる集落に着き、そこで息子を発見、天にも昇る心地で走り寄り健雄ちゃんを抱きしめたそう。

「父ちゃん」と叫び、二人で大泣きに泣いたそう。息子に会えた奇跡に、思わず両手を合わせたそう。それから健ちゃんは片時も父から離れず、安心したのかその夜はぐっすりと眠ったそう。家族と別れて十日余り、Aさんのお陰で無事だった健ちゃん、どんなにか心細かったことだろう。Aさんの話では、「妹が吉林に嫁ぎ、小さい子しみじみ感じたそう。Aさんに厚く礼を述べて、南下する父子の旅が始まった。それは、言葉に言い表せない壮絶で過酷な旅となった。

暑い日、雨の中、寒い夜、来る日も来る日もひたすら歩く。腹が減ったら空き家で食べ物をあさり、畑でトマト、キュウリ、食べられる野菜は何でも盗み、ときには朝鮮人から施しを受け、拾った瓶に川の水を入れて飲む。夜は野宿、運が良ければ空き家で眠れる。そんな毎日、何人もの朝鮮人が「子供売らないか、いくらなら売るか」と、声を掛けてくることしばしばあったそう。父が聞いたうわさによると、どのような事情かわからないが、相当数の子供が朝鮮人に売られたとか、それも三歳から十歳くらいまでの健康な子供、特に男の子が高値で売られたとか。事実かどうかはわからないが、もっぱらそんなうわさが聞こえてきたそう。「道端には、飢えと疲労で餓死する人も多く現れた。その死人の服をはぎ取り、靴の代わりに足に巻いたり、ときには着たりしたことも

あったそうだ。そんなことは普通の人間では決してできないこと。しかし、食べるものもない、着る物もない。戦争に負けてあの混乱の中、そうするしかなかった。なんとしても生きて、お前たちの所に帰るにはその方法しかなかった」と肩を振るわせ、涙を流した父。あまりの悲惨さ過酷さに、もう思い出したくないのだろう。二度と再びその話をする事はなかった。私は思った。もし私だったら、果たしてそんな状況の中、咸興まで無事に歩き着くことができただろうか。想像しても、考えても、全くわからない。

混乱の中、父は執念で弟を探し当てた。そして、長い道程を父と共に歩いた健ちゃん。本当に無事に、私たちの所に帰って来てくれた。そのことを思うとき胸が熱く、痛く、涙がこぼれるのです。母も、父と健ちゃんの顔を見てから元気をとり戻し、本当に良かったと思った。

##### 五 田浦さんとの別れ

曆も十一月に近いある日、田浦さんの家にソ連

った。当時の咸興は、女たちにとっては地獄であった。ソ連兵は自分の欲望を満たすため女たちに襲いかかり、抵抗すれば簡単に殺される。町の至る所で惨劇の嵐が吹きまわっていた。教養も知性も学問もないソ連兵たち。巷では、ソ連という国が、囚人をわか兵隊に仕立てて朝鮮に送り込んだのではないか、といううわさが流れたほどだった。

父は姉の身を案じ、知人の朝鮮人が有力者になっていたのを知り、早速相談に行った。その朝鮮人の紹介で、姉は保安隊長の家に女中として住み込むことになった。何の苦勞もなくお嬢様として大きくなった姉には、とても耐え難く、屈辱的で悲しかったことと思う。プライドの高かった姉も、そのときばかりは黙って父のあとに従って行った。

一週間に一度、姉は私たちの所にわずかなお金と食料を運んでくれた。高粱ばっかりの雑炊だったので、それは本当に嬉しかった。職のない父は、駅の構内に石炭を拾いに行くことがあったが、み

兵と朝鮮人が来た。この官舎も接収されることになった。田浦さんと私たちは、これから別々の家で暮らすことになった。小母さんは、ソ連兵から必死に守ったおじさんの形見の懐中時計、食料と身の回りの物、寝具などを用意され、残った物は私たちに下さった。めぼしい物はソ連兵や朝鮮人に持ち去られたあとであったが、裸同然の私たちは嬉しかった。当時の私たちの財産は、羅津から持ってきた鍋二つ、粉ミルク、何か知らないが常に母が大切にしていた風呂敷包み、そんなくらいで何もなかった。食料、着る物、寝具などいろいろ頂いたのに、お金まで下さって本当に有り難いことだった。

次の家は、道庁職員官舎と思われる住宅で、間取りは四畳半と八畳の二間、台所は四畳半の横、トイレは八畳の横で小さな家だった。四畳半には沖縄出身の荻野さん家族六人で、八畳には男性一人、子供連れの若夫婦三人、そして私たち八人の計十二人、全く知らない者同士の共同生活が始ま

んなが拾いに行くのと、駅員に見つかれば追い払われるなどで、石炭拾いも大変そうに思われた。田浦さんの所でお世話になっているときは、さほど生活に不自由はなかったが、家が替わってから私はも働かなくてはいけないようになった。姉と同様、苦勞知らずの我が儘娘ままごの私にも、つらい日が続くことになった。

咸興の冬も、とても寒かった。毎日毎日町に出て、タバコやヒマワリの種を売り歩いた。「シガレットニナーダ、セミチェックニナーダ」セミチェックとはひまわりの種のこと。手も足も凍てつく中、必死で頑張った。ときには健ちゃんを連れて行くこともあり、幼い子供を見て食べ物をくれる優しい朝鮮人もいたが、「お前のタバコの葉の中に、ガラスの粉が混じっている」と言って、取り上げる悪い朝鮮人の方が多かった。

咸興の町にも家族連れのソ連兵が多く、ときにはソ連兵の住む家を一軒一軒回り、「アラポートニナーダ」と声を掛け、仕事をしたこともあった。



子供の私には、なかなか仕事をさせてくれるソ連人は少なく、皿洗いか便所掃除くらいで、賃金は十円の軍票一枚、たまには米を油で炒めたご飯を出してくれる家もあり、そんなときは必ず新聞紙に包んで持って帰り、みんなで食べた。

子供の私が稼ぐ金は、日に四十円か三十円程度だったが、母に渡すと「有難う、有難う。助かるよ。また明日も頼むね」と涙を流して喜んでくれた。その母の言葉で毎日頑張った私だった。

はじめのころは優しかった地元の人、だんだんと避難民に対して冷たくなっていった。人の心が変わっていくのがよく分かった。咸興の町にも、寒さと飢えでたくさんの餓死者がでた。

町には春を売る女たちが多く並び、そのせいか、ソ連兵が家を襲うことが少なくなっていった。

道庁の中には、大勢のソ連兵がいた。ソ連兵の残飯をもらうために大勢の子供たちが、手に手にバケツや鍋を持って、道庁の柵の所に群がり鈴なりとなった。私もその中の一人「ダワイ、ダワイ」

り、長い間高熱が続いた。何の手当もできない私たち、外の寒さでできた天然の氷で冷やしてやることしかできなかつた。

激動の昭和二十年もそろそろ終わり、新しい年を迎える数日前のこと、八重子の容態が悪くなり、何も食べなくなつた。でも不思議なことに飴だけは欲しがり、消え入るような声で「飴、飴」と言う八重子に、死にもぐるいで見つけた仕事でもらつた十円を手に、闇市でくずの朝鮮飴を買い、八重子にそつと含ませてやることくらいしかできない私。涙がこぼれた。

日本人世話会の紹介で来た医師は、帽子にマスク、白衣に長靴姿。医者は、長靴も脱がずそのまま布団の上上がり腰をかがめて、八重子の体に触れることもなく「あー、これはもう駄目だ」と言つてさつさと帰つて行つた。むろん菓などない。腹が立つたが、どうすることもできないことが本当に悔しかつた。

二十一年一月七日、八重子は二年余りの短い命

と叫び、鍋に残飯をもらつた。残飯は黒パン、野菜、汁などが一緒くたで、黒パンは酸っぱくて、それはそれは豚のえさよりひどいものであつた。はじめ食べるのに非常に抵抗を感じたが、生き残るためには私たちにとって貴重な食料だつたことに間違いない。いつしかソ連兵の中にも顔なじみができて、黒パンの塊をくれたり、片言のロシア語を教えてくれる者も現れた。

#### 六 八重子の死

私たちの体にたくさんの虱しらみが住み着き、咸興中に発疹チフスが蔓延していった。子供や年寄り、体の弱っている者は飢えと発疹チフス、それに寒さで次々に死んでいった。虱の湧いた髪の毛は短く切り、衣類は鍋に湯を沸かし煮て殺す。その鍋で雑炊を煮る。きれいとか汚いとか、そんなことは問題ではなかつた。潰しても潰しても潰し切れない虱。長い間風呂に入っていないガサガサの肌から、情け容赦なく血を吸い続けた。

八重子も勝正も当然のごとく発疹チフスにかか

を閉じた。父母の悲しみは想像を絶するものだった。駆けつけた姉は小さく、小さくなつた八重子をしつかりと抱きしめて泣き崩れた。悔しさと悲しみで、胸はもうはち切れんばかりだった。姉はその晩、一夜だけ私たちと過ごし明かした。

凍てつくような寒い朝、男が三人ほどで荷車を引いてきた。死体を集めるための男たちだ。お湯できれいにふいた妹の体に「ごめんね、ごめんね、八重子に着せる晴着がないの」と言いながら、丁寧に自分の着物を脱いで、クルックルツと巻いていた母。戦争に負けるということはこんなことかと、また涙がこぼれた。

しつかり抱きしめた後、震える手で娘を男に渡すと、その場にどーっと崩れ号泣した母。冷たい顔に熱い涙が止めどもなく流れた。男は道の上に敷いた筵むしろの上に、妹を無造作に置くと、端からくるくると巻き縄で結び、ポーンと荷車に積んだ。荷台の上には大小の菰こも包みこもが既にいくつか積んであり、その車を無表情な顔で引つ張つて行つた。

荷車が見えなくなるまで、寒さを忘れ見送るだけの私たちだった。

山の麓には、土が凍てつく前に日本人の手でたくさんの大きな穴が掘られていたそうだ。その中の一つに、知らない人と一緒に埋められた八重子は、本当に淋しく悲しい葬式だった。花一輪買って供えてあげることができなかった。母の悲しみは長く長く続いたが、生きるために私は残飯もらいや物売り、仕事探しにと毎日走り回った。みんなが生きるためなら、どんなことでもした。十四歳の娘につらい毎日だった。

#### 七 うわさと決行

来る日も来る日も町に出て歩き回った私だが、一度も田浦のおばさんに出会うことはなかった。無性に会いたくなることがあったが、どこに住んでいるのか全くわからず、訪ねることができなかった。子供心に甘えたかったであろう。父も母も、常に田浦さんのことを気に掛けてよく口にしていた。

度線を越える密航船があることを、知り合いの朝鮮人から父が聞いてきた。母は鉄原行きで懲りたのか「もうだまされるのは嫌だ」とあまり乗り気ではなかった。父は母に言った。「この情報の出所は確実だ。海を漁船で渡るのでから多少の危険はあるが、必ず成功すると思う。これが最後の賭けだ」と、熱心に説得していた。しかし、母はなかなか応じなかった。父は姉を呼び寄せ、再度みんなで話し合った結果、父の言葉に従い決行することになった。船賃は一人千円、七人家族で七千円。とてつもない高額に驚いた。決まったからには準備が必要と、姉も私も懸命に働いた。しかし稼いだ金はその日で消えていく始末。そんな私たちに、母が言った。「あなたたちは心配しなくていいの。それより体を壊さないで頑張つて」と。でも、私はあまりにも高い船賃をどうやって作るのか心配だった。

そんなある日、一人の男が父を訪ねてきた。その人はボロ布で顔を隠し、腰をかがめて「徳田さ

火の気のない部屋は、外と同じですごく寒い。たぶん二月の節分ころだったと思うが、あるうわさが町に流れた。三十八度線を越えて、京城に行く汽車があるらしいと。うわさはたちまち町中に流れ、私たちも何度か汽車に乗った。しかし列車は鉄原までで、止まった列車は全く動かずまた咸興に引き返す。今度こそ、今度こそはと一縷の望みを持って乗ったが、いずれも無駄だった。無蓋車で雨に濡れたことも、雪が冷たくて寒さのあまり泣いたこともあった。中には、鉄原から野越え山越えて三十八度線を突破する人もあった。監視の目はとても厳しく、無事に越えることができるか本当に難しい選択だった。もし捕まれば、銃殺か強制労働が待っているのだ。荷物を盗られた人も多く、うわさは荷物を盗るために朝鮮人が流したデマだったのだ。元の生活に戻った私たちにも春は訪れた。

道庁の桜の木にも固いつぼみができて、外の寒さも少し和らいだころ、通川という港から三十八ん」と声を掛けながら、顔からボロを取った。みんなは息をのんだ。その顔は半分焼けただけ、片目がつぶれていた。朝鮮人の目を逃れるために自分で焼いたとか。その人は、父の旧知の警察官だった。「ご無事でしたか」と父と抱き合った目に涙があふれていた。うわさに聞いてはいたが、胸が痛かった。憲兵や警察官は、朝鮮人が鵜の目鷹の目で探し、捕まったが最後なぶり殺しにされるといふ時代、本当に痛ましいことだった。風のうわさだから事実かどうか分からないが、雄基の署長さんも殺されたと聞いた。その人は長居は無用と言って、そそくさと帰って行った。無事に日本の土を踏まれることを祈りながら、「どうか気を付けて」と父が言った。

決行も近づいていたある日、大事に持っていた風呂敷包みの中から、白い粉の入った瓶を母が取り出し、父に渡した。白い粉はサッカリンだった。

羅津を出るとき、ミルクの甘味にするために母が持ってきたらしい。母が言った。「羅南に行くとき

落とした信玄袋に入れておかなくて良かった」サツカリンは、見事みんなの船賃に替わった。

五月に入って、いよいよ決行の日がきた。通川までの道程はこれまた厳しく、監視の目が恐かった。私たちは裸同然で荷物らしいものは何も無いが、地元の人はいっぱいの荷物を、背負ったり持ったりと大変そうだった。持ってあげようとすると、避難民に取られると感じるのか、絶対に持たせなかった。通川に着いてからも、それはもう大変だった。子供の泣き声が警備隊に聞こえたら捕まると、口をふさいだり乳を飲ませたりと、親たちは必死だった。小さい子供のいない人は、「うるさい、泣かすな」とどなるばかりだった。

暗くなるまで銘々で隠れ、辺りがすっかり暗くなると、船頭が船着き場に急がせた。何人ぐらいいったか、五十人か、六十人ぐらいか、記憶にない。船頭は五人くらいで、「子供を泣かすな、聞こえたら捕まるぞ。早く、早く乗れ」とどなる。何度も、「早く乗れ、早くしろ」「乗ったら頭を低く

静かな闇の中、突然船頭が叫んだ。「もうすぐ南に入る。しかしこの船は南には行けない。お前たちは南からきた船に乗り移れ」と。一瞬みんなは我が耳を疑った。船の中から一斉に怒号が起きた。「そんな話は聞いていない。俺たちをだましたな。

こんな海の上で、危なくて移れるか、ばか野郎」などなど口々に叫び、子供は泣き出すし船の中は大騒動となった。揺れる船は今にも沈みそうで、全く生きた心地がしなかった。一隻の船が闇の中から現れ、私たちの船の横に並ぶと慣れた手つきで船と船を結び、「早くしろ、早く移れ。今度の船は小さいから荷物は積めない」「荷物は置いてゆけ」と、追い打ちをかけるようになった。驚いたみんなに、船頭は「早くしろ、早くしないと警備隊の船に捕まるぞ。嫌なものは俺たちとまた北に戻るか、南はもう目の前だ」と叫びながら、どんどんと私たちを次の船に追いやった。荒波が激しく寄せると、船は木の葉のように大揺れに揺れた。女や子供を先にと、月の光を頼りに船縁をつ

して伏せろ」と叫んだ。船は割合大きな漁船で、人も荷物も十分積み込むことができた。でも自由に動くことは難しく、少し窮屈だった。船全体にシートがかぶせられた。船が出る前に警備隊に見つかり、無数の鉄砲の弾が飛んできた。船頭は、何やら朝鮮語で大声でわめくと、船は岸を離れた。恐ろしくて声も出せず、みんな震えていた。陸の近くは危険だと、船はかなり沖の方を走った。大波が押し寄せるたびに、船は木の葉のように左右に大きく揺れた。

羅津から清津まで約四時間、内地の敦賀までは二泊三日、一万トン級の大きな汽船でも船酔いに随分悩まされたのに、不思議と船酔いしなかった。恐怖と緊張の連続で、それどころではなかったのだろう。やがてシートが外された。海の上は真っ暗、ただ月の光だけが青く海を照らしていた。日本海は機雷が多く流され、船頭は巧みに船を操り、警備隊にも目を光らせていた。「捕まったら、間違いないくその場で撃たれて死ぬ」と船頭が言った。

かみながら必死で乗り移った。海に落ちたら最後だ。みんな殺気立っていた。

何とか無事に乗り移った船は本当に小さく、少し詰め状態だった。船頭が縄をほどくと、荒波の中、船は南に向かって走り出した。荷物を取られた者の怒りはなかなか納まらず、どなっている人もいたが、一人の犠牲者も出さずに本当に良かったと喜び合った。

水平線に太陽が顔を出したころ、船頭が大声で叫んだ。「南だ、南だ、船が南に入ったぞ」その声に、小さい船の中から大きな歓喜の声が挙がった。「これで内地に、日本に帰れる」みんなの目から熱い涙があふれた。船はだんだんと陸地に近付き、昼頃、目的地の注文津に着いた。恐怖に満ちた地獄のような船旅？それは本当に長い長い半日だった。私たちはやっと南の土地を踏んだ。嬉し涙が止めどなく流れた。

上陸した者は、頭からDDTの粉を思い切りまかれた。虱退治のために。薙の敷いてある広い倉

庫に入れられ、検疫のためしばらく泊められた。

三角の玄米むすびの味は、忘れられない味となった。検疫も終わり、釜山に貨車で移動、釜山からフェリーのような船で内地の博多に上陸、船の中でもらったオニギリの味、繰り返し繰り返し流れていた、「リンゴの唄」絶対に忘れることはない。

羅津を出てから九カ月半、それはどんなに長い年月だったことか、内地の土を踏んで体が震えた。昭和二十一年五月二十日、やっとの思いで内地の土を踏んだ私たち、八重子のこと、頭に浮かび一緒に帰ってきたと、また新たな涙があふれた。

#### 八 京都に決まるまで

博多から汽車に乗ったが、復員兵や買い出しの人ですし詰め、むせかえるような状態だった。まず父の養父の出身地、滋賀県の稲枝に一時身を寄せた。家には既に清津から義兄家族が引き揚げていた。義兄たちは、終戦直後に帰ってきたと言っていた。何カ月かの垢を落とし、少し体を休めて次に向かったのは、岐阜県の父の生家だった。生

すごく暑かった。落ち着いた所は百万遍の引揚者の寮で、町に慣れるまで大変だった。

父は、知人から送られてくる品物を売りさばくため行商人となり、姉は買い出し専門、私はその品物を一人で闇市に持って行き、売る係り。咸興の日々を彷彿とさせる毎日が続いた。ときにはだまされて種芋を買ってきた姉、それを知らない私に、売れないと泣いたこともあった。ときには父の行商を手伝うこともあり、いろいろなことがあった。忘れられないのは、新潟から生干しの塩スルメが送られてきたとき、父と私はその塩スルメを京都駅に売りに行ったことがあった。七輪で父が炭をおこして焼く。それを私が構内で売る。駅員に見付かって、一目散で逃げたこと。食べ物のない時代、焼きたての熱々の塩スルメは面白いほどよく売れた。

いつかみんな母の所に行ったことがあった。母は「金がないというのは、こんなにもつらく苦しいものなのか。金がないのは首のないのと同じ

家は父の伯母が跡を継ぎ、養子を迎えていた。伯母は私たちの無事な姿を見て涙を流して喜んでくれたが、伯父は違った。裸同然の父に冷たかった。まるで厄介者が帰ってきたという感じで、母屋での生活は許されず、納屋に蓑を敷いての生活に、

父は母に「済まない。しばらくここで辛抱してくれ」と告げていた。伯母は自分の力のなさを、父に何度も詫びていた。父の気持ちに痛いように分かって悔しかった。しばらくして、父と母は伯母に私たちを託し、落ち着き先を探すために旅に出た。他の用事も兼ねての旅、ひと月余りで帰ってきた。父が言った。「東京、名古屋、大阪、神戸、みんな戦災で跡形もない状態。新潟か、それとも京都か」新潟にはごく親しい旧知の人がいるらしかったが、結局戦災から逃れた京都に決まった。京都といっても知らぬ土地、知人もいない。心細かった。

母と下の二人の姉弟を伯母の所に残し、父、姉、弟、私の四人で京都に出た。七月中ごろの京都は

こと」と、あの強気の母が涙ながらに「私を早く迎えにきて下さい」と、父に訴えたことがあった。私はどんなにつらく苦しいときも、その母の言葉を思い出し、早くみんなで暮らしたいと歯を食いしばり頑張った。

昭和二十二年の春、念願叶って山科に借家を借りて、一家全員そろって暮らすことができるようになった。ほぼ同じころ、待望の店を錦市場に出すこともできた父。私は十五歳、ようやく六月に中学一年生になれた。新しい生活が始まった。しかし幸せな生活は長く続かず、姉が突然体の不調を訴え、第一日赤に入院。両親は寝食を忘れて看病したが、姉はみるみるうちにやせ細っていった。特效薬はなく、姉は二十歳で人生の幕を引いた。父母の嘆き、神も仏もないのかと悲しみに気も狂わんばかり、父は「俺が八重子を死なせた」と悔やみ、母は「八重子も幸子も私は助けることができなかつた」と号泣するばかりだった。

咸興でどんな屈辱にも耐え忍び、必死に生きよ

うと・難辛苦を乗り越えて、やっと内地に帰れたのに、なんで、なんで、と悔し涙が止まらなかった。引き揚げてからも、さんざん苦労した姉。私は言葉もなくただ泣くことしかできなかった。花嫁姿を夢見ていた母は、姉の顔を美しく化粧すると、八重子の分もと晴着を着せた。引揚寮にいるとき、アメリカさんから贈られたララ物資に目を輝かせて、「うわー嬉しい。すごいわね、美味しそう」と笑っていた顔が忘れられない、しつかり者の姉を亡くした両親は、なかなか立ち直れなかった。

二十三年の初夏、私たちは京都市内に移った。念願の我が家。しかし不幸はまたもや我が家を襲う。勝正が全く音に反応しない。私たちは愕然とした。両親はあらゆる手を尽くしたが、耳は聞こえることはなかった。発疹チフスの高熱が原因なのか、うち続く不幸に悲嘆にくれる両親だった。私の中学生生活は、決して楽しいものではなかった。言葉遣いの違い、引揚者で貧乏、それに生ま

れた所が朝鮮だと分かると、朝鮮人ではないか、年齢が高いなどいろいろな虐めがあり、つらかった。英語の時間になると、ふとロシア語を覚えてくれたソ連兵のことなどを思い出していた。

不幸はまだ続き、私が三年生の秋ころに身体の不調を親に訴えだした。立つことも歩くこともできず、ただ死を待つ私に、父は姉の二の舞は絶対させぬと、あらゆる方面に奔走してくれた。私はその姿に答えることはできなかった。年も明けて昭和二十五年、正月気分も抜けたころ、アメリカで「ストレプトマイシン」という薬が発明され、日本に輸入されているらしいと知った父は、八方手を尽くし、神戸のある筋から五本購入し、すぐ私に打ってくれた。今にも死にそうな私は、嘘のように快復。父が買ってくれた特効薬のお陰で、卒業式にも無事出席することができた。体を治すため高校進学は断念し、その後二年余り近江八幡のサナトリウムで療養生活を送った。昭和二十七年秋、無事退院。父が後に、あの薬はものすごく

高かったと笑っていた。

ところで、羅津から帰った鍋二つ。その鍋は私たちが羅津に移った昭和十二年に母が買った物で、一つはアルミ、もう一つはアルマイトである。アルミの方は三十七年ごろまで約二十五年ぐらい、アルマイトの方は平成十四（二〇〇二）年ごろまで、約六十一年間使い続けた。

あとがき

長い人生いろいろな苦労もあったが、今は子供たちや孫に囲まれ、幸せな日々を送っている。それも父母のお陰、姉の助けがあったからと深く感謝し、姉と妹の分も精一杯元気に生きていきたいと思う。

私が生まれた雄基、育った羅津。つらい思い出の町、咸興。その咸興に一人淋しく眠っている八重子。近くて遠い北朝鮮。かの地に向かつて、手を合わせることはできない現実。いつの日か、かの地を訪れることが叶うだろうか。

戦争という魔物によって貴重な人生を変えられ

た人々、犠牲となり死んでいった多くの人に、心を込めて合掌。

見捨てられた幾多の兵隊さん、望みを叶えることもできずかの地で散っていった人々。様々な思いを乗り越えて、静かに眠ってほしい。

国民を奈落の底に突き落とす愚かな戦争は、絶対二度としてはならない。